

井上光一氏に反論する

——「部落解放運動は民主主義運動か」をめぐって——

大 賀 正 行

(一)

わたしは昨年の暮、紀要『部落解放研究』第37号に、杉之原論文批判ということで「国民的融合論批判と部落解放理論」という論文を書きました。この杉之原論文は、私ども部落解放同盟中央理論委員会がまとめた報告書に対する「国民融合論」の側からのまとまった批判です。これは『部落問題論究第8号』という雑誌にのった『解同』の理論的混迷の深化」という題の非常に長い論文です。それなりに、きっちりとした論文だと思えますから、是非とも全文を読んで頂きたいと思えます。わたしの論文はこ

の杉之原論文に対する反批判ということを書いてきたわけですが、未だに杉之原氏の方からの反応はいっこうありません。馬原氏も何も答えていません。ところが全解連の支援する組織、北原泰作氏などがつくった国民融合をめざす部落問題全国会議という組織がありますが、その事務局の井上光一氏、この方は初めてですが、その井上光一氏がその機関紙『国民融合通信』の二〇号（一九八四年六月）に「部落解放運動は社会主義運動か」と題する短い論文ですが、私の論文に対する反論といえますか批評を書いたわけです。

わたしは紀要三七号の論文のなかで、国民融合論のな

かで馬原鉄男氏や紳利夫氏と、中川信義氏（大阪市立大学）、河村望氏（東京都立大学）、彼らの考え方とは違ふ。中川氏、河村氏の方は私の考え方に近いということで、国民融合論内部で大分意見の違いがあると指摘したわけですが、井上光一氏はそれに対して、いや意見は何も違っていないという弁解なんです。井上光一氏はこういうふうに言っております。

Ⅱ大賀氏が最近の国民融合論のなかで最も問題とする点の一つに、北原泰作氏や馬原鉄男氏に共通している最大の欠陥である「明治以降の日本資本主義や資本主義と部落問題の関係をまったくみていないということ」という批判が「国民融合論」を支持する側の研究者からも出されていることがある。その代表例として中川信義氏や河村望氏の主張を引用している。河村氏の現代の部落差別が独占資本主義段階での差別の一形態であるとの指摘を指して国民融合論内部の批判として大賀氏はとらえている。しかし、河村氏が大賀氏の主張するような部落差別拡大再生産論でないことをまず前提としてとらえねばならないⅡ

井上光一氏は私のことを部落差別拡大再生産論者と決めつけているわけですが、これはまったくの誤解です。つづけて、井上光一氏は次のようにのべています。

Ⅲ戦前と戦後の部落問題の質的変化について、氏の認識は北原氏や馬原氏とならかわりがないことは、これまでの数次の論争を注意深くみれば分かることである。なお、そのうえにたって現在なお残されている部落差別が独占資本主義段階での差別の一形態であるとの指摘は、国民融合論を質的に高めこそすれ、国民融合論を批判するものではない。七六年に大津でおこなわれた国民融合全国会議の第一回シンポジウムの討論のなかでも、部落差別が基本的には解消する方向へ向いつつも、なお残されているのはなぜかという問題が論議され、現代の独占資本にとって、自らの資本増殖に利用できるものは、たとえそれが前近代的な違制でも利用するのではという論議があった。しかし、現代日本の大独占にとって部落差別が搾取と収奪を強化するための最も主要な分裂支配の手段であるとは、事実認識としてありえない。だからといって、無条件に無媒介的に部落差別が解消されるわけでもない。だからこそ、中川信義氏の主張するように、独占資本主義の民主的規制を強めていかななくてはならないのである。大賀氏が主張する、国民融合論内部の批判とするものは、実際には国民融合論の強化に他ならないものだⅡ

井上光一氏によれば意見のちがいが「国民融合論強化と

云うことになるわけです。

(二)

ここで確認しなければならぬことは、これまでの国民融合論は、部落問題や部落差別は、「封建時代の残りカス遺物・傷跡」であり、戦前には物的基礎はあったが、戦後改革により物的基礎はなくなった。これは根のない花だから解消の方向にあるという論理だったということです。だから啓発等を進めていけば、現体制の下でも解決し得るという論理であったとわたしたちは理解してきたと思います。

ところが、杉之原論文も含めて、違ふといっていることに、私はアレ？と思ったわけです。たとえば、井上光一氏は次のように言っています。

大賀氏が問題とする第二の点は、「内外からの批判を受けて、『国民的融合論』の手直しをしようとした」杉之原寿一氏に向けられている。杉之原氏は、大賀氏らの国民融合論への「批判」である「国民融合論は部落差別を単なる封建遺制としてのみとらえ、日本資本主義の階級支配や搾取・収奪とのかかわりにおいて部落問題をとらえるという階級的視点を欠落させ、資本主義の発展とともに部落差別は解消する」という論に対して「われ

われは、資本主義の発展・高度化するとともに部落差別が解消するなど述べたことはまったくくない」と国民融合論の立場を明確にした（『解同の現論的混迷の深化』・「部落問題論究」第八号、一九八三年五月）。このことをさして、北原批判だと大賀氏はいうのである。杉之原論文でも、次のように弁解がましく書かれています。

彼らによると、国民融合論は部落差別を単なる封建的身分遺制の問題としてのみとらえ、日本資本主義の階級支配や搾取・収奪とのかかわりにおいて部落問題をとらえるという階級的視点を欠落させ、資本主義の発展とともに部落差別は自然に解消すると主張しているというのである。しかしこれは、国民融合論に対する意識的な歪曲である。

つまり、大賀らの批判はあたっていない、言っていないことを言っているといつて批判している、というのです。勝手にデッチあげて批判しているというのです。ということ、我々の理論はなにも、単なる封建遺制論でもない、それから階級的視点を、資本主義の問題は十分にしている、こう言っているわけなんです。あれっと思いませんか。杉之原氏は続いて、後の方で「われわれは、資本主義の発展・高度化とともに部落差別が自然に解消

するなど述べたことはまったくなく、むしろそのような考えを『近代化』路線ないし『近代主義』的な見解として批判することにも「とらえているわけです。そうであればなぜわたしと論争しなければならないのかと思つたわけです。おそらく、向うは北原さんに罪を全部なすりつけようとしていると思います。それは、北原理論であって、大賀の見解は、北原批判としては当たっているが、国民融合論批判としては、的をえていないんだと、こう言いたげなんです。杉之原氏はこういう考え方なんです。

ところが、井上光一氏の方は、彼は北原氏と同じ組織に居たということもあって、北原氏を次のように弁護しているわけです。

このことをさして、北原批判だと大賀氏は言うのである。大賀氏が引用した部落解放第一回全国集会での北原提案のなかの「差別される部落民は、日本の資本主義が完全な発展を遂げず…中略…封建的な身分差別をうけて苦しんでいるのであります」との整合性を問題にしているのである。しかし、この部落解放同盟の困難な状況のなかで、北原提案が出された時期と国民融合論が全国的に提起されていく時期とは違いがあることを指摘すること、大賀氏に対する反批判として充分であろう。私にはなぜ充分なのかさっぱり分かりませんが。

大賀氏は、さらに杉之原氏が、本来的にはブルジョア民主主義の課題である封建的身分差別からの解放という課題は「今日では民主主義をふみにじろうとする独占資本との闘いをぬきにしては達成できない課題、反独占・民主主義の課題である」としていることをさして、北原氏や馬原氏と違つとしている。しかし、大賀氏の前引用した北原提案の後段の文章はどうであつたらうか。「部落の完全解放が実現するのは、真に徹底した民主主義的変革がなし遂げられて、日本の社会が完全に民主化され、旧時代の遺物がすっかり取りのぞかれたときである」としているのである。この文章を注意深く読めば北原氏の「真に徹底した民主主義的変革」の指すところが、部落問題は反独占・民主主義の課題であることがよく分るのである。

この点も、さっぱり分からないのですが、北原理論は混乱していると思ふんです。反独占民主主義の課題だと言つてみたり、反封建民主主義の課題だと言つてみたり、北原理論はチャンポン理論だと思ふんです。

井上光一氏は、北原氏も反独占民主主義の課題だと言っているのではないかと言いたげなんです。

北原氏のかつての文章の一部をさして国民融合論全体を批判する、ましてや内部で理論的混乱を起してい

るかの如くにいうのは、大賀氏が「朝田理論」の評価をめぐって何年も美のない論議をしているわが身にひき比べてのことであろうか。」

わたしも、ある意味では「朝田理論」批判者なんです。が、中央執行委員長を直接批判することもできませんし、朝田氏は、こう言いたかったんだと、朝田氏を弁護する方たちで批判してきたわけです。組織の中におるとそうなるものです。

だから、井上光一氏も北原氏と同じ釜の飯を食った中ですからこのように言うのは分からんわけでもないわけですがそれなりに、向うも言いつくろってきていると思うんです。

しかし、いずれにしてもそこで分かることは、現代の部落差別は、独占資本主義段階の一形態であるということ、そして反独占民主主義の課題であり、これが国民融合論である、このようになってきたということです。が

そういうえはいうほど最近の国民融合論とかつての国民融合論とのきれつが一層うきほりになってくるわけです。ですから皆さん、もう一度五、六年前の馬原鉄男氏の論文、神利夫氏の論文、北原氏の三人の論文を読んでいただきたい。つまり、彼らがいいたかったのは、部落差別は封建社会の残りカス、封建遺制だということです。それで、戦前

我々は、国民融合論が出てきた直後から、国民融合論は資本主義と闘わない理論だということ、一生懸命に批判してきましたわけです。その結果、ようやく国民融合論も部落解放が反独占民主主義の課題だといひだしてきたわけですが、それならわたしたちと同じだと思っんです。

彼らは、戦後は、部落差別を支える物的基礎はなくなつたと言っています。ところが、杉之原論文を素直に読めば、独占資本という部落差別を残す物的基礎はあるということになると思っんです。彼らは、戦前は反封建ブルジョア民主主義の課題であつて、戦後は反独占民主主義の課題であると思っんです。つまり、戦前の部落解放の敵は半封建制だ（これは間違ひですが）、そして戦後は独占資本だと、それじゃどちらにしても部落差別を残し、支える物的基礎はあるわけです。さて、ここを彼らはどのようにとりつくろつのでしょうか。

戦後は、半封建的物的基礎がなくなつたにしても、独占資本という物質的な基礎があるわけです。そうすれば、現代の独占資本と反動権力を打ち倒すことになると思つたは思っんです。ところが、彼らは違つと思っんです。独占資本と闘わねばならないが、それと社会主義との課題は無関係というんです。独占資本が物的基礎でないとすればそれはたんに政策だということになります。

は、天皇制、寄生地主という物的基礎があつたので、部落差別が解消しなかつた。

しかし、戦後は物的基礎はなくなつたと。だから、資本主義の発達と世の中の民主化によって、部落差別は解消の方向にあるといひたわけです。

(三)

ところが昨年になって、反独占民主主義の課題だと杉之原氏が言ひだしてきたわけです。次の通りです。

現代日本の独占資本と反動権力は、階級支配と搾取・収奪を強化するための分裂支配政策をおしすすめるなかで、部落差別をはじめ残存するさまざまな差別を利用し、あるいはまた新たな差別を作りだしながら、基本的人権をふみにじり、民主主義を破壊する策動を強めてきている。部落差別が今日なお一掃されず、部落問題の早急な解決がさまたげられているのはこのためである。したがって封建的身分差別からの解放というブルジョア民主主義の要求は、今日では、民主主義をふみにじろうとする独占資本との闘いをぬきにしては達成できない課題、つまり反独占・民主主義の課題である。と、こうなつたわけです。

独占資本の問題であれば、社会主義の問題を避けられないとわたしは思ひますが、独占資本は敵であるけれども、社会主義の問題は避けられるというのが杉之原氏の理論だと思っんです。それでわたしは、これはレーニンが批判したカウツキー主義ではないのか。あなたは、マルクス・レーニン主義者なのかカウツキー主義者なのかはつきりして頂きたいと思ひたわけです。「自分は、カウツキー主義者だ」というのならいいんです。そのかわり、共産主義者、マルクス・レーニン主義者の看板をおろしなさいと、このようにつめよつていられるわけです。

つまり杉之原氏は、これまでの馬原氏や北原氏の物的基礎はなくなつたというような論に対して、反独占民主主義の課題であるといひだしました。これが、杉之原氏と馬原、北原両氏との大きな違いです。しかし、杉之原氏は、社会主義との問題を切りはなすわけです。反独占民主主義の課題であるけれども、資本主義の枠の中で解決できるという論なんです。杉之原氏は、はっきりとカウツキー主義者だとわたしはみております。

ところが、中川氏や河村氏はどういう立場か。中川氏や河村氏の方は、社会主義の問題を射程にのべています。そういう意味で、中川氏、河村氏はマルクス主義者と思っんです。ところが、中川氏や河村氏と、杉原氏との間に違い

はないというのが井上光一論文です。

(四)

私がかういふと井上光一氏は次のように言うわけです。

「私が大賀氏にもっとも批判の目を向けなければならぬとするのは次のことである。氏は、杉之原氏の部落問題を反独占・民主主義の課題であることに對して、「大衆運動の立場では資本主義の枠内でも解決できるはずのものだ」ということで民主主義的課題を提起することは正しいが、中略、結局のところ社会主義にもっていかない限り根本的な解決はないことを理解させる指導性が必要」としていることである。いつ、部落解放運動が社会主義運動の一環になったのだろうか。かつて解放同盟のなかで、運動が日本共産党のひきまわしだとして反共攻撃をしたのは一体誰だったのだろうか。部落民がすべて社会主義への道、それも大賀氏流の道へ進むことを「理解」しなければならぬのだろうか。部落解放運動が部落差別をなくそうという課題でのみ組織された運動だと思っていたのは間違っていたのだろうか。——ということ、——「部落解放運動は社会主義運動か」と詰問されるわけです。

やるように、単に機関占領によって引きまわすことではありません。杉之原氏はじめ、国民融合論者は「革命なくして解放なし」式のセクト主義のうらがえしとして社会主義や革命の問題を正しく提起することを放棄してしまっているようです。

わたしは、このように批判したわけです。井上氏や杉之原氏は、「俺は民主主義者であって社会主義者でない」とか「カウツキー主義者であってマルクス主義者でない」というのならいいのですが、「俺はマルクス主義者、共産主義者」と言っていて、この問題から逃げるところが許せないわたしは批判しているわけです。

部落解放運動の内部には、色々な考え方の人達がいるわけです。民主主義者も居れば、社会主義者も居るわけです。幅広い運動なんです。部落差別反対、部落解放というただ一点で団結しているわけです。しかし、その運動をどう社会主義の課題と結びつけるかということを一先懸命やる、これが社会主義者としての独自活動なんです。部落解放運動という民主主義運動の中での活動です。ところが、部落解放運動は民主主義運動ですから、融和主義者や改良主義者によって導かれる場合もあるし、社会主義者に導かれる場合もあるし、いろんな人に導かれるわけです。だから、右へ行ったり、左へ行ったりしながら、進んでいくも

井上光一氏が引用した部分は、去年の全研でわたしが報告した文章ですが、この中略というところの文章はかなり長いんです。ゆうに半ページ分ぐらゐを中略してあるんです。こんな引用をされたんでは著者の主張がねじ曲げられてしまっています。

わたしは、解放運動が社会主義運動だとは、一度も言ったことがありません。わたしはいつも指導性ということをつけています。紀要の四十号の論文でも、まだ井上光一氏からの批判が出る前でしたが、次のようにのべています。

「ただ部落解放運動には幅広い層を結集しなければなりませんし、またできるのですから、それを社会主義にやらなければ部落差別はなくならないと教条主義的に押しつけることは絶対にさげなければなりません。」

本来、大衆運動としての部落解放運動は民主主義を追求する運動であり、それ自体社会主義をめざすものではありません。しかしこの運動の敵は独占資本であるという共通性において（独占資本を打倒し社会主義をめざす立場に立つものは）、部落解放運動をいかに社会主義の側に導くかという視点は決して忘れてはならないことがらです。但し、これは大衆みずからの体験を通して社会主義以外に真の部落解放はないという確信と信頼関係のなかで実現することであって、日共や特定セクトがよく

のなんです。その中で部落大衆が、結局、誰の考え方が一番正しいか、この考え方以外にわたしの真の願いが達成されないということ、理屈よりも体で体験していくということです。大衆というのはいわば、「経験主義者」でありますから、だまされだまされ、結局何が正しいのかということを経験していくものです。それを、できるだけ失敗のないように、しかも促進するために社会主義をめざすもののが努力が必要なのです。

部落解放運動というのは、民主主義をめざす運動です。しかし、今日の民主主義を目指す運動は反独占民主主義の運動です。この反独占民主主義の運動を社会主義の方向へどう向けていくのかということが、マルクス主義者の努力であると思ふんです。そのこと、部落解放運動が社会主義を目指す必要はないと押しつけることは、違つ問題なのです。

一九六五〇六年、答申が出た前後、日共は、「部落解放運動は敵を明らかにせよ」「社会主義なくして部落解放なし」「革命なくして解放なし」「安保破壊なくして部落解放はない」といって、実にセクト的、急進的でありました。ところが、一八〇度転換して、社会主義や革命の問題は一切語らんとするのが現在の日共なんです。そういう意味では、民主主義闘争と社会主義闘争が弁証法的にどのよ

うな関係にあるのかということに彼らはわかっていない。だから、混乱するのです。

ところが、国民融合論者も部落解放運動は民主主義をめざす反独占闘争だと言ってきたんですから、解消の方向にあるとか物的基礎はなくなったとかあまり言えなくなってきたわけです。最近、全解連の岡映氏の意見などを聞いていましても解消の方向にあるとはあまり言っていないようです。解消の方向にあるとはいえ、なお厳しい状況があるという言い方によってきています。これで、国民融合論も破綻したと思うんです。ただ、どういいつくろうかという事で悩んでいると思うんです。

(研究部長)